

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	宮本 佳範
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程修了	博士 (人間文化)	社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

観光に関する専門知識を教授するだけでなく、観光を題材として幅広く社会で活かすことができるスキルを持った人材を育成することを目標とする。

(計画)

ゼミはもちろん、講義科目であってもパソコンでの調べ学習、グループワーク、発表を取り入れたアクティブ・ラーニングを進めていく。

○担当科目（前期・後期）

（前期）観光・サービス概論、国内観光地理、地域観光論、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）観光・サービス基礎、海外観光地理、現代観光論、レジャー産業論、東南アジアの文化と社会、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

講義科目では、その日の講義内容をまとめる作業を重視し、文章を書く力をつける取り組みを行った。また、レジャー産業論、地域観光論、現代観光論、国内観光地理、海外観光地理、東南アジアの文化と社会では、学生による発表を取り入れた講義を行った。

2年のゼミでは「産学連携スタディーツアー企画プロジェクト」として、旅行会社の方のアドバイスを受けつつ海外スタディーツアーを企画し、学内で海外研修（2単位）として実際に参加者を募集するというプロジェクトを行った。また、3年のゼミでは、『海外卒業旅行 企画コンテスト 2017』（日本旅行業協会主催）や『あいち学生観光まちづくりアワード』に向けて取り組んだ。

○作成した教科書・教材

観光・サービスコースの基礎的な科目（観光・サービス基礎、観光・サービス概論）では、穴埋め形式のプリント教材などを作成した。

○自己評価

講義科目では、学生による発表を取り入れたことで学生の主体性、集中力を高めることができた。産学連携スタディーツアー企画プロジェクトや、海外卒業旅行企画コンテストなどへチャレンジすることで、チームで話し合いながら作業する経験や学生の主体的な活動を推進することができた。総合的に、当初の目標をおおむね達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

持続可能な観光の実現に向けた観光システムおよび観光者の行為の問題等に関する研究

○目標・計画

(目標)

これまで、科研費を得て、観光者の倫理・責任、行為の問題などについて、主にアジアにおけるエスニック・ツーリズムおよび自然観光の現場を事例として研究してきた。科研費が切れた今年度は、今後の科研費獲得に向けて、観光者の行為の問題および持続可能な観光の実現に向けた観光システム等に関する新たな研究対象地域を探し、オリジナリティのある研究の方向性を見出すことを目標とする。

(計画)

昨年までのベトナムのサパでの研究を継続し、その調査結果を論文として発表する。さらに、上記目標を達するために、これまでの研究対象としてきた地域とは異なる地域の視察を行う計画である。

○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・宮本佳範「第10章 地域と連携した活動の現実的課題—名東区魅力マップ作りに取り組んで—」愛知東邦大学地域創造研究所編『学生の「力」をのばす大学教育——その試みと葛藤 地域創造研究叢書 No. 22』唯学書房、2014年11月。
- ・宮本佳範「第5章 観光に関わる人権問題」愛知東邦大学地域創造研究所編『人が人らしく生きるために一人権について考える 地域創造研究叢書 No. 20』唯学書房、2013年7月。

(学術論文)

- ・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理—ブータンの事例から—」『東邦学誌』第47巻第2号、pp. 1-13、2018年。
- ・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー：ベトナムのファンシーパン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第15号、pp. 91-101、2017年。（査読有）
- ・宮本佳範「ツアー登山問題に関する論点の批判的考察：アクセシビリティとツアー登山者の倫理」『日本山岳文化学会論集』第14号、pp. 67-75、2016年。（査読あり）
- ・宮本佳範「観光倫理研究の課題と展望」『観光学評論』第4巻第2号、pp. 135-148、2016年。（査読有）
- ・宮本佳範「ミャンマーの少数民族観光に関する考察」『東邦学誌』第43巻第1号、pp. 9-25、2014年。
- ・宮本佳範「少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理—タイ・ラオス・ベトナムの事例から—」『東邦学誌』第41巻第2号、pp. 85-99、2012年。
- ・宮本佳範・大塚奈美「ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状と課題：観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティ」『東邦学誌』第41巻第1号、pp. 29-45、2012年
- ・宮本佳範「観光対象として”持続すべき文化”に関する考察—持続可能なエスニック・ツーリズムへの視点—」『東邦学誌』第40巻第1号、pp. 19-33、2011年。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・宮本佳範（研究代表者）平成26年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)）採択：研究課題名「持続可能な観光の実現に寄与する観光倫理の構築に向けた研究」（課題番号：26360080）【最終年度】

○所属学会

観光学術学会、日本山岳文化学会

○自己評価

本年度は、一昨年のブータンでの調査の結果を論文としてまとめ、東邦学誌で発表することができた。また、これまで行ってきたアジアから脱し、研究領域を広げるためにメキシコやキューバの視察を行った（私費）。それ自体で研究成果につながるものではないが、その経験は今後活かす

ことができると考える。全体として、当初の計画に沿った研究を行うことができた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

委員会活動やその他各種会議等を通じて大学運営に貢献する。

(計画)

配属された委員会（入試委員会、学生寮運営委員会）で、その職責を果たす。

○学内委員等

学生寮運営委員会委員長、入試委員会委員

○自己評価

入試委員会委員としては、来年度以降の入試の方式に関する検討や入試の円滑な実施に貢献をすることができた。学生寮運営委員会委員長としては、学生寮に関わるのは初めてながら、大きな問題も生じることなく、その職責を果たすことができた。今後は、より良くしていくために、より積極的なかかわり方を模索していきたい。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

高校への出張講義等で高大連携に貢献する。学生と社会をつなげることを目標とする。また、本学に限らず、関係する大学の学生・教職員の学びやすい環境づくりに貢献する。

(計画)

産官学連携プロジェクト等に積極的に実施することで、教育と社会貢献を両立させる。インターカレッジコープ愛知の理事としての活動を行う。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

東邦高校で高大連携授業を行った。ゼミでは、名古屋の旅行会社と連携した「産学連携スタディーツアー企画プロジェクト」を行った。

○自己評価

東邦高校で旅行企画に関する体験型の講義を行い、高大連携に貢献できた。インターカレッジコープ愛知理事長として、本学はもちろん、インカレの他大学の含め、学生および教職員のよりよい大学生活の形成に間接的に貢献できた。また、ゼミで行った産学連携のプロジェクトは教育としての側面のみでなく、地域連携としても評価できる。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

Ⅵ 総括

研究に関しては、限られた時間のなか、おおむね計画通り実施することができた。学生の教育に関しても、アクティブ・ラーニングを意識し、教育改善に努めることができた。大学運営に関する業務については、委員会等で自らの立場に即した仕事を行うことができた。社会貢献に関して

は十分とはいえず、その活動の幅を広げるよう努力していきたい。

以 上